

藤 棚

22号

世田谷区 深沢4-10-1
東京学芸大学附属
世田谷小学校内
青山附属同窓会
振替 東京 3-159497
青山附属同窓会

発行人 石谷 久彦
幹事長 森 昭彦
編集者

附属だから・附属らしく

亀 岬 嘉子
(旧教員)

四月のはじめ同窓会から「附小の思い出・外から見た附小」という題をいただいた。昭和五十年三月に附小を離れて既に十五年、またたくまの年月であった。附小の思い出は遠のいていくかとみえるのだが、附小の卒業生は、当時の教員を大切にしていって同窓会や級会を開いて懐かしい時代を甦らせてくださる。

また私の教職最後の学校であった近くの公立小学校長、幼稚園長時代の多くの子ども達の中で、附中に進んだり、附小に入学してきた同窓生があることも幸いしている。昨年、附小の研究発表会の折、本館から別館に移る渡り廊下で「園長先生」と挨拶した児童の凛々しさが嬉しかった。

マナーの良さが見事だった。触れ合いのあった人間関係の絆が、附小の生活の中に、さりげなく清々しく流れているという感動を持った瞬間でもあった。昭和二十一年に私が附小に着任した当時、二年生から六年生まで一貫して担任した卒業生が、今年の同窓会を四月十八日に開いてくださった。多忙な時期にかかわらず多数参加して下さり話題はつきなかつた。現在五十才代の働き盛り、それぞれの分野で活躍されている方々である。

下馬の旧校舎の重厚な教室の雰囲気や、独特な制服と伝統のある校風等、そこに居た者の共感できる情感と誇りがある。思い出は、深くまた新しい。附小時代の児童は、豊かな個性を持ち、力があつた。それは天分ともいえるもので、皆に囲まれてみると、いつも新しい発見があり、創造があり楽しかった。当時の教員も師範出の時計組(卒業期に成績優秀な者に与えられた記念賞)の俊英が、ずらりと揃っていて、新任の私など教室に入る時でさえ強い緊張感を伴ったものである。

それは敗戦の悲惨さと空しさを味わざるを得なかつた中で、只管、新教育の研究と児童の指導に勤しんでいた教員の矜情と使命感が張りのある研究生活を余儀なくしていたからでもある。然し厳しく、また暖かく充実した附小について、よく耳にしたことばがある。それは、どこの社会でもあるようだが宿命的なものともいえる。一人の卒業生が素晴らしい事をする、さすがは附小の卒業生という、しくはれば附小の卒業生なのにという。うまくやれば附小だから当然等の見方とことばである。それ程、附小の存在は注目され、世間から意識され期待されているともいえよう。(そんな世評があるとも知らず可愛く無邪気な児童は、東急コーチの中で賑やかに語らい東横線のホームで、小鳥のように呼び交いを楽しんでいる。本当に明るい！)

附小だから出来るといわれ続けた中で、附属でしか出来ないことが最近あつた。附小の教員の大方は、都の採用試験を受けて指導主事・教頭・校長になるか、大学教授への道が或は独自の道を進み、様々な足跡を残された。公立校では同一校に数年勤務すれば必ず他地区校に異動転任しなければならぬ規則だが、今年の附属には正に附属らしい快挙があつた。

それは新卒以来、同一校に四十年間勤務された教員がおいになつた。東先生である。教えを受けた卒業生が停年を祝い、同窓生に呼びかけ「おつかれさまの会」を持つに至つた。これこそ附小の卒業生らしいできごとである。教育功労賞を受けられた先生の業績については、教官の研究誌「藤棚十四号」に詳細に記述されているので割愛させていたたく。

同窓会の強い絆と暖かい配慮こそ永遠にと御発展を祈りつつ。